

シネマ日記



No. 57

○月×日 デンマークの郊外。学校で執拗なイジメに遭う少年のエリアスだが、アフリカの難民キャンプで医師として活動続けるスウェーデン人の父親が心の支えだ。ある日、母親を亡くし、祖母の家に父親とともに引越してきたクリスチャンが転向してくる。

彼がイジメつ子に復讐したことで、二人は仲良くなる…。「殴られた。だから殴った」と。「未来を生きる君たちへ」(デンマーク、スサンネ・ピア監督)の原題は「復讐」だ。そして、アフリカから休暇で帰国した父親が子供たちと公園で遊んでいるときのこと、子供同士がいさかいを仲裁したのだが、相手の子供の父親が

ランコによるファシスト独裁政権に変わっていく。内戦で妻と幼子を亡くした喜劇役者のホルへは、悲しみに暮れる。終戦後、相手のエンリケに再会し、孤児のミゲルとともに三人で暮らし始める。仲間たちとも再び舞台に立ち、人々に笑いを届けていく。「ペーパーボード」幸せは翼に乗って」(スペイン、エミリオ・アラゴン監督)は、彼らの歌や踊り、笑いが劇中の観客だけでなく、見る人の心にも灯をともし、懐かしい感情を呼び起こしてくれる。主人公のホルへは自分を父親のように慕ってくれる10歳のミゲルに、死んだわが子を重ねていく。「いつか二人だけのネタを作ろう」と約束するのだった。ミゲルの手品では本物の鳩ならぬ折り紙のペーパーボードが飛び出してくる。まるで希望の鳥だ。しかし、そんなある日、一座に難題が降りかかる。ランコの前で「御前公演」を命じられるのだ。自分の妻子を奪った敵である。はたして、ホルへはどうしたか…。スペインの庶民がかいぐくつてき

いきなり殴りかかる。でも、非暴力主義者のエリアスの父親は抵抗しない。「戦争はそうやって始まるのだ」と。だが、クリスチャンは納得しない。エリアスを誘って、その男への復讐を秘かに計画するのだった。一方、少年たちの家庭も問題を抱えている。父親の浮気もとて父母が別居しているエリアス。また母の死が父親のせいだったとして父親に心を閉ざすクリスチャン。大人の社会への憎悪が蠢いているのだ。エリアスの父親は暴力が日常茶飯事の 아프리카 では、理性に生きていたつもりだったが、ある日、妊婦の腹を引き裂き胎児が男か女かを賭け事にする無法者に、怒りを爆発させ、自らも「報復」の感情にとらわれてしまう。そして、少年たちは手製の爆弾を作り上げ、実行に向かつていく…。「報復」か「赦し」か。日常的な憎悪から戦争というグローバルな世界まで、重い問いを投げかけている。アカデミー外国語映画賞の受賞作だ。

○月×日 1930年代のスペイン、内戦を経て

た悲しい歴史。哀切の感情あふれるラストシーン…。

○月×日 1983年、イタリヤで「バザリア法」が制定された。世界で初めて精神病患者を監獄のように閉じ込めることを禁止した画期的な法律だ。「自由」を得た患者たちが協同組合をつくり、仕事を得て社会復帰していくまでをコメディタッチに描いたのが「人生、ここにあり」(ジュリオ・マンフレドニア監督)で、実話に基づく。社会復帰への挑戦の努力は喝采ものだ。

○月×日 「ツリー・オブ・ライフ」(テレンス・マリック監督)は、ある実業家(シオン・ペン)がふと遠い少年時代を回想する。反抗的な自分の周りには厳格すぎる父(ブラッド・ピット)と純粹すぎるほど愛に満ちた母(エシカ・チャステイン)がいた…。人生は瞬く間に過ぎ去っていく。運命的ともいえる「生命の連鎖」の中に、家族の葛藤と絆もまた結ばれている。それは、欧米流にいえば「神の御心」なのだろうし、東洋的には「諦観」のようなものか。(内藤哲